



友 Yu-Ai 愛

理事長: 立花志瑞雄

館長: ブラッドリー&スーザン・コックス

〒730-0842 広島市中区舟入中町11-13 クレール舟入中町302

TEL 082-503-3191

Email: office@wfchiroshima.org Website: www.wfchiroshima.org

Website



Facebook



韓国PAX: 2024年4月27日～5月2日 ジム・ロナルド 2

ツチャファミリーの訪問 山根美智子 3

チャールズ・オッペンハイマーの訪問 服部淳子 4

女学院インターンシップ ティエン ローズ 5

WFCでの体験 ニック・ワン 8

8月6日の行事 マシュー・ベイトマン 9

阿部静子さん被爆証言 車地かほり 10

アメリカPAX: 2024年7月31日～8月11日

PAX委員長 三村庸子 11

PAXを振り返って マシュー・ベイトマン 12

アメリカPAX2024の夏 ロジャー・エドマーク 13

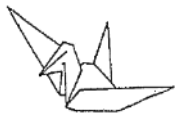
参加者 ショーン・アレント 15

ホラシオ・ペレズーモラレス 16

チャールズ・マウントジョイ 17

お別れの言葉 マラカイ・ネルソン 18

新館長紹介とあいさつ ブラッドリー&スーザン・コックス 20



なんで韓国PAX? それって、どんな感じで、どんな風になってるの 参加した方がいい? コーディネーター ジム・ロナルド

その答えは、2024年の韓国PAX参加者レポートの中で見つけることができます。いくつかはこの文章の下の方に書いてありますので、この前書きを読むのをやめて、どうぞ遠慮なくそちらへお進みください!

過去100年にわたる韓国との関係について、日本ではその歴史教育がほとんどされてこなかった結果、また日本のメディアや政治家の歪んだ視点も相まって、多くの日本人は20世紀前半に何が起こったのかを知らずに、韓国人に対する不信と憎悪の感情の中で育ってきました。

悲しいことに、これは現在にもあてはまります。韓国人は、私達が共有している歴史のことをよく知っています。先祖が韓国の人々の虐待や死に関与した、現在の日本の政治家についてさえ、私達以上に知っています。多くの韓国人が日本人に対して不信感を抱き、ヒロシマとその平和のメッセージに対してさえ、「自分たちが被害者だとでも思っているの? 我々の仲間は何をしたのか、わかっているの?」と感じているのも、不思議なことではないのです。

だからこそ、日本人、そして韓国人は、韓国PAXが必要なのです。

韓国PAXプログラムの中心になるものは、韓国人や日本人のホストファミリーの家に泊まり、一緒に食事をし、一緒に話し、そしてお互い正直になる、そのような温かく寛大な歓迎の中にあります。時にはカラオケで一緒に歌い、子供たちと一緒に遊びます。そして時には、一緒に泣くこともあります。

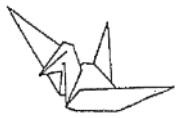
今年、広島から1人の被爆者と高校生5人を含む8人のチームが韓国へのPAXプログラムに参加しました。去年は8人の韓国人の訪問を受け入れました。ある日、私達が縮景園の休憩所に座って、これまでの韓国PAXを振り返っていた時、ひとりの韓国人参加者が、ありがたいことに、こう言いながら泣き出しました。「でもどうして、私たちにこんなに惜しみなく、親切にしてくれるの?」と。

私達の多くは涙を浮かべてこう言うかもしれません。「あなたがた、韓国人のPAXの皆さんが、まず最初に、私たちにとても親切で寛大であり、そして私達をととても歓迎し、愛し、許してくれているからです!」と。



私達は、ソウル郊外の端にあるピースビルディングに入居している様々な平和活動家達と共に、KOPIという素晴らしい韓国PAXのパートナー団体に恵まれています。

今年のプログラム・マネージャーであるパク・ユンソとアビー・ロング、気配りの行き届いたすべての企画、それぞれのホストファミリーの温かく寛大な歓迎、そして、運転手、ガイド、通訳、ヘルパー、友人として韓国PAXに参加してくれた一人ひとりに心から感謝しています!



ハーブ・ツチヤさん家族の歓迎会

山根美智子

2024年5月20日(月)に、シアトルよりハーブ・ツチヤさんご家族4人をお迎えして、歓迎の持ち寄りパーティーをしました。ハーブさんは、残念なことに昨年2023年8月21日に脳腫瘍のため、天国に召されました。家族の構成はハーブさんの娘、Kerryさん、夫のBenさん、娘のTeriさんと息子のCoryさんでした。

2013年8月には、「沈黙を破って」の朗読劇や、マイク・スターンによるOne World Concertが広島にて開かれ、ハーブさんとの忘れられない時を過ごすことができました。私たちの事をBFF (Best Friends Forever) と呼んでくださいました。

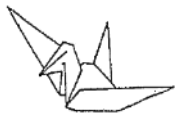
2013年9月から10月に平和使節団16名(女性12名、男性4名)が、アメリカを訪問しました。このような大人数の受け入れを可能にしたのは、元館長JoAnnとLarry Simsの貢献の賜物です。シアトルで、藤井正一さん、田中健三さん、堀江壮さん、ロン先生がハーブさん宅でホーム・ステイをして素晴らしい時間を過ごされました。それ以来、藤井正一さんはBenさんとずっと連絡を取り合っておられ、この度、歓迎会が実現できたのも、WFCの名誉理事である藤井さんのお蔭でした。

当日は、たくさんの美味しい食事が用意され、館長やピース・クワイアー、英語クラスの余興が催されました。田中ゆき子さんから、平和人形と着物の帯でできたテーブルセンターが贈られて、とても喜ばれました。



2015年9月にピース・リソース・センターの40周年に渡辺朝香さん、池田美穂さんと私で参加しました。シアトルにも行き、ハーブさんの家にも泊まらせていただきました。JoAnnやHerbさんに連れられて、シュモーさんが作られた公園に行き、サダコの像に捧げられた千羽鶴を見ました。今年7月にメディアが報じた「サダコ像」の盗難には、本当に心が打ちひしがれました。

ハーブさんの人生の鉄則「Be Kind, Be Kind, Be Kind」は、心に響きます。ハーブさんは、私たちの心に、大きな足跡を残してくださいました。



チャールズ・オッペンハイマーの訪問

服部淳子



第二次世界大戦中にアメリカで原爆開発を主導して「原爆の父」と呼ばれた米国の理論物理学者ロバート・オッペンハイマーの孫のチャールズ・オッペンハイマー氏が5月末来日し、6月3日東京の日本記者クラブでの会見までの2日間、広島・平和公園を訪れ、小倉桂子さんをはじめ広島の被爆者と面会しました。5月31日、WFCの活動をご存知の広島での受入／紹介者のかたから、まさに突然WFCに被爆者と会いたいとリクエストがありました。そして、6月1日午後、WFCに森下弘先生のお話を聞きに来られることになりました。WFCでの滞在時間は1時間半とのことでした。

6月1日（土）チャールズ氏は、自身の映像制作クルーや同行者を伴い、WFCに到着しました。彼は居間の奥にしつらえられた対談席に森下先生と座りました。

会場には、前日理事長がチャールズ氏側のコーディネーターと急きょ調整の上呼びかけ、参集された3人の被爆者を含むWFC側の10人余りの同席者と紹介者が観覧席で待っていて、米国からの同行者は前側の観覧席に座りました。通訳は服部淳子（副理事長）が務めました。

森下先生の被爆証言が行われました。チャールズ氏の米国の映像制作のクルーが録画を行い、WFCも記録のため了承を得て録画を行いました。

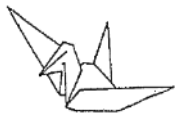
被爆証言後、森下先生から祖父が戦後、米国政府と米国民によって崇められるべき業績を残したにも関わらず、軍拡競争を進めるトルーマン大統領との軋轢により苦しい立場に追いやられたのは気の毒であったと話しかけられたチャールズ氏は祖父について、「彼は戦時下では皆そうであるように自分の義務を果たすべく努めた。」と述べ、「しかし戦後、軍拡競争は危険だと世に広めるためにできる限りのことをしようとした。私は人が悲惨な戦争に苛まれることのないように努めたい。」と答えました。

また、質疑応答で会場の胎内被爆者の方から「広島に現役の大統領が2人、核のフットボールを携えて訪れた。我々被爆者は彼らがこの広島を見て、原爆を落とすべきでなかったとか、原爆の被害に対する謝罪の言葉を期待した。しかし本国の退役軍人からの圧力が強かったと聞いている。答えにくい質問と思うが、どう感じられますか？」と質問がありました。チャールズ氏は、

「実際複雑だと思うが、皆さんの失望はよくわかる。落とした側の責任は問われるべき。世界のどこであれ、爆弾を落とされた人たちには、謝罪を受ける権利がある。」と答えました。森下先生は対談を振り返り、チャールズ氏の姿を見て、証言の力を感じたとおっしゃっていました。

最後に記念撮影し、一行は次の広島の訪問先へ発って行きました。





女学院インターン生の感想

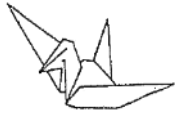
インターン生 ティエン

先日、ワールド・フレンドシップ・センター（WFC）のインターン生として参加できたことは光栄でした。私は多くの人と出会い、教科書やWFCや被爆者の話から多くのことを学びました。まず、インターンシップ中に、阿部静子さんの避難と証言マッププロジェクトに参加し、8月8日の平和の日の活動のチラシをデザインする機会がありました。それ以外にも、広島原爆被害者の岡原民幸さんと堀江壮さんに直接会って証言を聞く機会もありました。これらのプロジェクトを通じて、実際のプロジェクトのためのデジタルマップやチラシのデザインなど、新しいスキルを学び、自分自身に挑戦する機会を得ました。被爆者の証言は私に、怒り、痛み、そして平和の分野でさらに研究し活動する意欲など、多くの感情や考えをもたらしました。広島だけでなく日本の歴史について得た知識は、平和研究に対する私の理解を深め、今後もそれを基に学び続けることができるでしょう。

8月6日の経験は、このインターンシップで最も忘れられない思い出の一つとなりました。原爆の犠牲者を追悼するために世界各地から多くの人々が集まる平和記念式典に参加する特別な機会を得ました。私は広島に5年間住んでいますが、式典に参加するのは今回が初めてで、この経験によって広島市の平和について新たな視点が得られ、来年8月6日に平和記念公園に行く動機となりました。式典の後、阿部静子さんの証言があり、私は戦争の悲惨さについて深く考え、これからはもっともっと多くの人に平和を広めていく道を探していきたいと強く思いました。特に、私たちの地図プロジェクトが証言で使われているのを見たとき、私はこのイベントに参加できたことをとても嬉しく誇りに思い、今後もこのような有意義なイベントにさらに貢献できることを心から願っています。特にその日はアメリカから来た平和交流使節団と会い、平和について素晴らしい議論を交わしました。私たちは若い世代として、より多くの人々に平和を広めるために何ができるかについてたくさん話し合い、考えました。

インターンシップはわずか数カ月でしたが、得た知識と経験は長く私の中に残るでしょう。最後になりましたが、このインターンシップでの私の最も重要な経験の一つは、世界各地の多くの若者と会い、平和について、そして戦争による損失から人々を守り、永続的な意味のある平和に向けて取り組むために若い世代として何ができるかについて話し合ったことです。





女学院インターン生の感想

ローズ

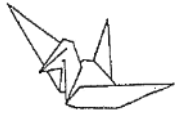


これは私の初めてのインターンシップの体験で、ワールド・フрендシップ・センターで初めてのインターンシップができたことを嬉しく思います。それは素晴らしい経験でした。まずこのインターンシップに参加した時、私は自分のスキルに不安を感じ、緊張していました。経験不足で不安を感じていましたが、目標を達成するまでは不安な気持ちを我慢することにしました。私は自分自身に目標を設定し、コミュニケーションスキルの向上など、自分自身を向上させるために努力しました。新しい課題に不安を感じましたが、自分の能力を探求し、新しいことに挑戦することが好きなので、それでも意欲的でした。時々大変でしたが、私は前向きに取り組んでいました。最初は、私たちがどのような仕事をするのか正確に分からなかったので、少し緊張しましたが、最終的には、8月6日の被爆者、阿部静子さんの証言に備えて、証言マッピングに取り組むという仕事を任されました。私たちの最初の仕事は、彼女の証言を読むことでした。広島原爆被爆者の一人の物語を知る機会を得られたことは、本当に光栄です。私にとって、これはまたとない機会でした。

私はテクノロジーとオンラインツールにとっても興味がありますが、タイムライン付きの地図を作るのは初めての経験でした。地図に記された正確な場所を見つけること、地図を作るためにどの材料を使うかを決めること、正確さを確かめるために英語と日本語の証言を読むことなど、いくつかの事に苦労しました。こうした困難にも関わらず、インターンシップの初日としては素晴らしい一日だったと思います。また、この経験は今後に向けて大きな自信にもなりました。その後も、私たちは地図の作成作業を続けました。私たちは仕事に慣れ、次第に効率が良くなりました。あちこちでミスもしましたが、そこから学びました。私はワクワクし始め、このインターンシップで何を達成できるか楽しみで仕方ありませんでした。さらに、チラシのデザインなど、他の小さなプロジェクトにも取り組みました。私はデザインが好きなので、これは自信がありました。私たちは、それぞれ独特の雰囲気を持つ様々なチラシのスタイルを集めました。その他にも、多くの良い経験をしました。このインターンシップ中、被爆者の訪問が2回あり、私たちは午後に被爆者の証言を共有しました。それぞれの話が異なっているのが興味深いです。最初の訪問は岡原民幸さんでした。彼は父親の原爆体験や、原爆の余波が他の民間人に与えた影響について、自分自身の体験を例に挙げて話してくれました。間接的な影響についてはこれまで考えたことがありませんでした。このインターンシップで初めて、間接的な影響について学びました。彼の話聞くことができ、光栄です。今後、他の被爆者の体験談を聞くときには、これらの問題について考えたいと思います。彼の証言は、過去と現在において、被爆者を忘れず尊重すること、そして建設的な影響を与え、核問題に対する意識を高めることの必要性を浮き彫りにしました。

もう一人の午後の訪問者は、堀江壮さんでした。彼はすぐに、手作りの木製の鉛筆など、私たちに素晴らしい贈り物をくれました。手作りのものを貰うのは、いつも嬉しい事です。彼の証言は、私がこれまで聞いた他の証言とは少し違っていました。彼は、平和、環境、戦争について質問し、聞き手とさらに議論を重ねました。これらは議論したり考えたりするのが難しいテーマですが、私たちは皆、彼の世界平和への願いをはっきりと理解できました。日によっては、平和や核兵器などに強い関心を持つ様々な国からのインターン生が参加する事もありました。私たちはとても仲良くなれましたし、ここでのインターンシップ中に、他の人と一緒に働くことになるとは思っていませんでした。短期間でも様々な方との出会いは、とても貴重な経験でした。

(つづく)



女学院インターン生の感想

ローズ

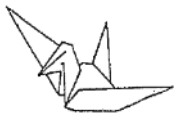
(つづき)

8月6日のイベントに話を戻します。広島に住んで10年になりますが、初めて平和記念式典に参加しました。このような意義深い行事に参加できて興味をそそられました。この日は広島への原爆投下を記念する日で、私は特にアメリカからの平和交流使節団に会えたことを嬉しく思いました。プログラムや活動中に彼らと交流し、意見を交換できたことは、素晴らしい機会でした。午前中の平和記念公園での式典の後、私たちはついに阿部静子さんの個人的な証言を聞きました。彼女の体験談を聞いて深く感動し、原爆被爆者の話を聞けて幸運だと思いました。彼女の話は私に深い感動を与え、争いのない世界への憧れをかきたてました。また証言の間、ティエンと私が完成させたプロジェクトが背景で見られるのを誇らしく思いました。インターン生の私たち二人にとって、充実したひと時でした。

午後、私は新しい、しかし個人的にはやりがいのある経験に直面しました。私たちは、日本の高校生とアメリカのPAXメンバーの間の平和に関する議論を通訳するという課題に取り組みました。私はテーブルにいた8人のために通訳しなければなりませんでした。それぞれが独自の意見と視点に満ちた、長くて有意義な会話になりました。最も難しかったのは、各話者の話を注意深く聞きながら素早くメモを取り、英語から日本語に通訳することでした。楽しくもあり、大変でもありました。通訳者に対する尊敬の念が深まりました。通訳者がいなければ、意見交換はほぼ不可能だったでしょうから。

全体的に、このインターンシップはとても楽しく、デジタルマップの作製、チラシのデザイン、リアルタイム通訳など、多くの新しいスキルを習得できました。最初は苦労しましたが、インターンシップのパートナーも苦労したと思いますが、私たちは成長し、将来役立つ知識を得たと感じました。与えられたプロジェクトを達成しただけでなく、他では得られない多くの情報も学びました。このインターンシップを通じて、平和について独自の視点を持つ多くの人々と出会いました。私はこれらの新鮮な視点を、さらに平和のアイデアを発展させるために活用していきます。インターンとして受け入れてくれたワールド・フレンドシップ・センターに感謝しています。ほんの短い期間でしたが、ワールド・フレンドシップ・センターでインターンをした経験は一生大切にします。地図を作ることで、自分が何かの一部であると感じます。規模の大小にかかわらず、何かの一部になることはやりがいがあります。





WFCでの体験

ニック・ワン

広島と長崎への原爆投下は私が長年関心を寄せていた主題です。私はアメリカ政府による日本への原爆投下の決定について歴史研究論文を書きました。大学の文書館で資料を読み、被爆者へのインタビューを読み、またオッペンハイマーやトルーマン大統領の演説も読みました。

広島の世界・フрендシップ・センターを訪れるまでは、私はこのテーマについて十分に理解していると思っていました。

WFCでは、被爆者の壮さんの証言を聞くという非常に貴重な機会を得ました。初めて壮さんに会ったとき、彼は固い握手と亡くなった祖父を思い出させる優しい笑顔で迎えてくれました。彼は証言の前に手作りの鉛筆をくれて、なぜ戦争や紛争を止めなければならないのかと尋ねました。突然の質問に、私は頭が真っ白になりました。私は「戦争は大勢の人々を殺すので戦争を止めなければいけません。」より以上のことを言いたかったのです。彼は私がショックを受けているのを見て微笑み、証言を始めました。

彼は、父親が原爆投下の6日後に亡くなり、母親、兄弟、そして彼自身も原爆による病気にかかったことを話しました。しかし、自分が経験したことでアメリカを憎んでいるかと問われると、彼はすぐに首を横に振り、「政府と国民は違います。」と答えました。5歳の時に父親を亡くし、自分を含め家族全員が原爆の放射能による病気にかかっていることを目撃し、ある日突然家族の一人を失うかもしれないという恐怖の中で暮らしていたことで、アメリカに対する憎しみを抱くことになったかも知れないのに、彼は心を広く持つことを選びました。

彼が自分の経験を話した後で、私は環境科学への関心について彼と話し合いました。高校3年生の時、エネルギー源について習ってから、私は原子力に興味を持つようになりました。壮さんは原子力に強く反対しており、全ての国が原子力をエネルギー源として利用するのを止めるべきだと考えています。彼は、原子炉の近くに住むガン患者の統計を見せてくれました。彼は、原子力は危険であり、環境に非常に有害な可能性があるとして述べました。

証言の後で、彼は再び「私たちはなぜ戦争や紛争を止めなければならないのか」と尋ねました。けれど彼の経験を聞いた後、私は「戦争は大勢の人々を殺すので戦争を止めなければいけません。」よりもっと良い答えを見つけました。戦争は紛争中に人々を殺すだけでなく、戦争とは何の関係もない将来の世代にも苦痛をもたらします。それは戦争で使用された化学物質によってもたらされた病気による慢性的な身体的苦痛かも知れませんが、あるいは心理的な苦痛かも知れません。突然亡くなること、家族を失うこと、戦争で使用された化学物質によって引き起こされた病気を持っている可能性のために疎外されることへの果てしない恐怖などです。

被爆者の方と直接お話しできる機会を得られたことは、私にとって本当に幸運な事でした。被爆者は日々高齢化しており、このような機会は少なくなっているからです。私が関心を持つテーマを研究する機会を与えてくださり、また壮さんと話をして彼の話や考えを聞く機会を与えてくださったWFCに心から感謝しています。



WFC 59 周年 8月6日を振り返る

前館長 マシュー・ベイトマン



広島への原爆投下79周年記念式典を厳粛に行うにあたって、私たちは近くからまた遠くから新しい友人や古い友人たちと集まり、時間と距離を超えた連帯を表しました。それが、毎年8月6日が象徴すべき日、つまり追悼と団結の日です。世界平和と核軍縮の現状を振り返ると、これらの分野での進歩が後退していることは明らかです。簡単だと言う人は誰もいませんし、前進する道も単純ではありません。平和の追求は常に困難を伴いますが、歴史の流れを変えた大惨事の後ではなおさらでした。たとえ軍縮と和解に向けた歩みが遅く感じられるとしても、広島物語は忘れてはならないものです。

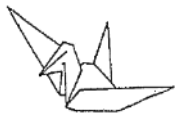
この日は、GSEのインターン、PAX 代表、WFC ボランティアが参加して、記念式典で始まりました。WFCのディレクターとしてこのイベントに参加するのは今年で3年目になりますが、PAX 代表やインターンの新鮮な目でイベントを見ることで、新たな視点を得ることができました。彼らの参加と反省は、私たちに、初めてこの式典を目撃することの力を思い出させてくれました。

その後、私たちはアステールプラザに移動し、車地かほりさんのご尽力のおかげで、インタビュー形式で阿部静子さんの証言を聞く機会に恵まれました。あの悲劇の日の体験を描いた地図を背景に、阿部さんの言葉は戦争が人間に与えた犠牲を深く思い起こさせるものでした。このひとりで、私たちは小グループで議論しながら、聞くことから平和構築における自分たちの役割について考えることへと切り替えることができました。特に、これらの会話がバイリンガルで行われ、意見交換がより包括的で影響力のあるものになるよう配慮してくれた以前のインターン生には感謝しています。

昼食後、PAX代表団は平和公園を散策し、様々な式典を見学し、犠牲者を追悼するために人々が集まる様々な方法について考えました。その夜、私たちは再びバーバラ記念碑に集まりました。今年のイベントでは、PAX代表団の広島での体験に重点が置かれました。グループは、お互いの交流を楽しみながら平和について話し合い、インターンによる大切な通訳作業によってさらに充実したものとなりました。インターンの役割は、WFCの通訳者がこうしたつながりの時に果たす重要な貢献を私たちに思い出させてくれました。

その日は灯籠流しで終わりました。私たちは小グループに分かれてこの厳粛な伝統を守り、その後、個人的な反省やコミュニティとの更なる関わりのために別れました。それは、深い内省の瞬間と対話とつながりの機会が融合した一日の締めくくりにふさわしいものでした。

今後、80周年が広島市に何をもたらすのか、私には想像する事しかできません。私たちが前進するにつれ、この出来事は、想像を絶する苦しみに直面した人間の精神の回復力を思い出させてくれます。その回復力には、記憶し、反省し、より平和な世界に向けて努力し続ける責任が伴います。



阿部静子さん 8月6日被爆証言

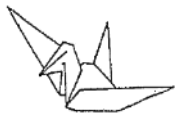
車地かほり

今年の8・6被爆証言は阿部静子さん（97歳）をお迎えしてアステールプラザ4階の和室大広間で開かれました。御高齢の為、車地が用意した質問事項に沿ってお話し頂くインタビュー形式をとり通訳はWFCアーカイブスプロジェクトのメンバーである小松真理子さんにお願いしました。会場後方のテーブルに阿部さんからお借りした昔の写真にキャプションを付けたものや新聞記事を並べたり阿部さんが証言される時、彼女の前のテーブルに阿部夫妻の結婚式の写真を飾ったりしました。この結婚式の写真はもともと白黒写真でしたが庭田杏珠さんが阿部さんと相談しながらカラー化された貴重なものでした。女学院インターン生の二人は阿部さんが鶴見橋の近くの大塚町で被爆された後、海田町の自宅に避難された道のりをパワーポイントで作ってくれました。阿部さんの証言は淡々としていながら信念の籠った人の胸を打つものでした。又小松さんの素晴らしい通訳で会場にいた外国の方々にも良く伝わったのではないかと思います。証言の中で阿部さんに昭和31年3月国会に被爆者救済を求める請願に上京された時、帰りの夜行列車の中でご自分が作られた「悲しみに苦しみに」という詩を朗読して頂きました。この詩は曲が付けられて当時、被団協の集会などでよく歌われていたそうです。余談ですがWFCのピースクワイアの皆でこの曲を練習し今年のバーバラ・レイノルズの碑前の集いで合唱しました。この曲が再び広く人々の間で歌われる様になる事を願っています。



会場はアメリカPAXのメンバー、WFCの関係者、一般の人々に加えNHKをはじめとするテレビ局や新聞社などの報道関係者でほぼ満席に近い70名位の人々で埋まっていました。その中で特筆すべき事は阿部さんのご家族が参加された事です。4人のひ孫さん達も最前列でお行儀良く阿部さんのお話を聞いていました。被爆証言は修学旅行生や内外から広島を訪れる人々に対しては盛んに行われていますが、家族間ではどうでしょうか？最近新聞記事で読んだ情報に依ると被爆2世の6割は親から被爆体験を聞いていないそうです。ちなみに私の両親も被爆者なのですが、二人とも生前ほとんど原爆に関して話しませんでした。それを考えると阿部さんのご家族がひ孫さんまで参加して下さったのは印象深い出来事でした。また証言終了後、アメリカPAXの若者たちが一人一人阿部さんの所に挨拶に行き握手したり言葉を交わしたりしていたのは感動的な光景でした。彼らにとって阿部さんの証言が一生忘れられないものであって欲しいと思います。

今年の夏は記録破りの暑さが長く続き外出を控えるようにというアナウンスがテレビから聞こえない日は無いほどでした。そんな中、快く被爆証言を引き受け会場までお出かけ下さった阿部さんに心からお礼を申し上げます。そして何時までもお元気で私達をお導き下さいますように祈念致します。



アメリカPAX報告 PAX委員長 三村庸子



今回のPAXはコロナ以降初めてのアメリカからの使節団でした。

Sean、Horasio、Benjamin、ChalesというWilmington Collegeの学生2人を含む若いグループをお迎えしました。

7月末からの予定というので暑いことは予想されたのですが、1898年に気象庁始まって以来という猛暑で、マッシュ館長マラカイ館長も連日厳しい暑さの中で彼らを案内し、15分刻みのスケジュールをこなしていきました。8月6日の広島、と9日の長崎ということで、何もかもすごい混雑が予想され、まだアメリカ側から、予定が送られてくる以前の5月初めからホテルや会場の予約などを始めました。

初日は、WFCの長年の友人で、長崎での被爆者、岩谷久仁子さんをお迎えして内々でのお話を伺いました。

岩谷さんは1964年の広島・長崎世界平和巡礼に参加され、またバーバラさんとも深い交流がありました。2日目は平和記念公園の碑巡りをしたのち、資料館を見学し、その後国立祈念館で、いろんな資料を読んだり、被爆者の証言ビデオを見たりして、自由に時間を過ごしたのち、袋町小学校の資料館に行きました。第1日2日を通して私が興味深く感じたのは、セッションのあと、すぐ車座になって館長はじめ前館長のRogerとKathyと8人で、報告会(debrief)を持ち各自の意見や感想の交換会をするのですが、皆さんご自分の意見をはっきり言って、そうすることで、自分の経験だけでなく他人の意見を取り入れて、物事を深く理解できることでした。私の英語力では、細かいところまで理解することはできませんでしたが、日本人のコミュニティではかつて経験をしたことが有りませんでした。

それを驚きと共に皆さんにお伝えしましたが、きちんと自分の考えを言葉に出して言うという姿勢は日本人に欠けていることだと思いました。

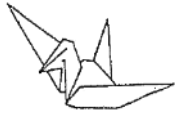
代表団のプレゼンの内容は非常に濃いもので、Seanのプレゼンでは、アメリカが世界の覇者たる地位を得る為に、軍備(特に核装備)に莫大な税金をつぎ込むあまり、あの裕福な合衆国の健康保険がないがしろにされている現実を知りました。非常に分かりやすい図を示してくれて学ぶことが多かったです。

Chalesのプレゼンでは平等ではなく、公平の概念が大切だということを痛切に感じました。

1週間の広島の後、一行は8日に長崎に向けて出発しました。

長崎は、前回2010年の長崎のPAXの旅と違って、まず宿泊場所から予約するのに困難を伴いました。以前はWFCの山根理事や渡辺理事がアレンジして来られた、宿泊・被爆証言・祈念公園ガイドなどが、コロナ禍で止めてしまったもの、あるいは関係者の高齢のため活動を休止されたことなどで、お願いすることでもできず一つ一つが手探りの状態でした。

またタイミング悪く、長崎に向かった日に、日向灘地震に遭遇し、新幹線の乗り換えなどにマッシュ館長は肝を冷やされたようですが、機転で、遅れはしましたが、無事に切り抜かれたようです。長崎の感想は館長たちにお任せすることにして、広島の日間では無事に、PAXの皆様厳しい暑さの中ではあったのですが、たくさんのことを学んで頂けたのではないかと考えています。これには理事の皆様、関係者の皆様のご協力があったの事と深く感謝しております。有難うございました。



2024アメリカPAX

マシュー・ベイトマン

2024年のアメリカPAXプログラムは、平和使節団に広島歴史と遺産を紹介するという第一の目標を立派に達成した。被爆証言や見学、その他の重要な体験を通じて、参加者は広島物語と平和構築の継続的な関連性への理解を深めることができた。今年はさらに、「世代間のつながりの育む」「国際関係の強化」という2つの側面が際立っていた。

被爆者とアメリカの学生を結び付けた昨年のPAXプログラムと同様に、今年は特に大学生や30歳以下の若い参加者の取り込みに重点を置いた。これにより、広島コミュニティ内で新たな関係を築くための重要な基盤が構築された。平和資料センター(PRC)が学習の重要な一部となっているウィルミントン・カレッジからの参加者との絆を深めることができたのも、今年のプログラムの重要な要素であった。また、長年の支援者であるロジャーとキャシー（前館長）が再び参加してくれたことで、私たちのつながりはさらに深まった。メンバーは館長とともに長崎も訪れ、浦上天主堂のコミュニティと新たな関係を築いた。

今年のPAXを終えて大きな気づきは、プログラム自体が発展していることだった。最初はこのプログラムが、広島出来事のある程度典型的な、おそらく静かなやり方で紹介するのだと考えていた。しかし今年は、偏見や個人的な欠点といったストレートな意見など、新たな議論が有機的に生まれた。参加者は示唆に富んだ質問を投げかけ、資料と深く関わり、新鮮なエネルギーと好奇心をもたらした。論理的に考えてプログラムは一杯だった。プレゼンテーションの時間がもっとあれば貴重であったが、これは8月初旬の多忙なスケジュールに縛られることなく、今後の訪問に取り入れることができるだろう。

朝8時30分ごろから朝食をとり、夜8時30分ごろまで一緒に過ごすというハードなスケジュールだった。週の初めは、被爆者の証言や資料館見学、主要な史跡の訪問など、参加者が広島歴史にどっぷり浸れるような真面目なイベントから始まった。週の後半には、交流イベントや宮島訪問で前半の激しさとのバランスをとり、参加者たちはくつろぎ、振り返ることができた。

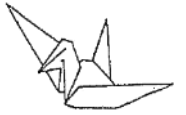


個人的には、初めて長崎を訪れたことは、目の覚めるような経験のひとつだった。平和公園を見たり、話を聞いたり、地域の人たちと関わることで、新たな視点を得ることができた。広島の話は私の体験に深く刻み込まれているが、長崎を自分の目で見ることで、悲劇を直感的に感じることもできた。しかし、長崎にも独自の特徴と教訓があり、2つの都市を比較することで、核兵器と戦争がもたらすより大きな影響についての理解が深まった。

私にとっての驚きのひとつは、広島ことはよく知っていたにもかかわらず、長崎物語について知らなかったことがいかに多かったかを思い知ったことだ。長崎に行ったことで、この体験がより身近なものに感じられ、この活動を継続し、核の歴史に関する知識を広げることの重要性を再認識した。今回の訪問を実現させ、長崎の平和式典に参加させてくれたWFCに心から感謝している。

いつものように、プログラムの成功の多くはWFCのサポートとホスピタリティによるものだった。ツアーや証言、本川小学校プログラムやホームステイに至るまで、WFCはプログラムのあらゆる要素が有意義でインパクトのあるものになるよう配慮してくれた。参加者が公式な宿泊ゲストでなくても、私たちは彼らをコミュニティの一員として扱い、毎日朝食と会話から始め、強いつながりと友情の感覚を生み出した。

2025年のPAXプログラムを先読みすると、これまでで最もやりがいのあるものになると思う。WFC60周年という節目を迎える来年のプログラムは、間違いなく最も参加者が多く、インパクトのあるものになるでしょう。特に今年の経験を基に、参加者たちにより強いつながりや学びの機会をどのように作っていけるか、今から心が弾んでいる。



アメリカPAX 2024夏来日訪問

ロジャー&キャシー・エドマーク

PAXは非常にうまく行き、4人の代表団は日本で好評を博しました。以下は私たちの旅からの抜粋です。1962年にバーバラ・レイノルズが初めて平和巡礼に出て以来、後につながるPAXがいかに素晴らしい活動であり、また現在に至るまで続いてそうであったことをご理解いただく一助になれば幸いです。当時も、そして今も「一期一会が平和を築くこと」を目指す私たちにとって、経験談を交換しあうことは重要なことなのです。

広島

広島での8日間のスケジュールは、原爆とその後の歴史、広島の平和の証言、日本の文化、そしてワールド・フレンドシップ・センターの関係者との多くの交流やディスカッションなど、代表団がそれらの体験にフルに浸れるようなアクティビティがうまく組み合わせられていました。

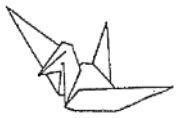
4人の代表はそれぞれ2回ずつプレゼンテーションを行いました。それぞれが平和についての異なる視点を提供しました。ショーンは、WPSR（社会的責任を果たすためのワシントン州医師会）とWANW（核兵器に反対するワシントン州医師会）の活動について語り、核兵器廃絶に向けた説得力のあるストーリーを展開すると同時に、同じ米国の中でもシアトルとワシントン州の人々が核兵器について受けている対照的な影響について語りました。オラシオは、彼自身の文化的伝統について、また、ダンスがどのように人々を内なる平和の感覚に結びつけるために使われているかを語りました。チャールズは、ヘルスケアにおける正義と、それなくして平和はないと語りかけました。ベンは、ワシントンDCでの平和と正義のためのロビー活動の経験と、非暴力主義がいかに変化をもたらすかについて話しました。WFCは、8月4日の主な一般向けプレゼンテーションを宣伝する大変優れたパンフレットを作成しました。WFCの8月4日の講演とその後の素晴らしいポットラックに参加しましたが、一般参加はほとんどありませんでした。

それとは対照的に、8月6日のWFCでの阿部静子さんの被爆者トークは、70人近い満員の会場で、メディアや報道関係者を含むたくさんの外部からの参加をもって行われました。4人の代表団はその場で紹介され、阿部さんの話にとっても感動していました。彼らは講演後、阿部さんと共に過ごすことができ、また他のたくさんの人たちと出会うことができました。

もちろん、8月6日朝の記念式典に参加することは、うだるような暑さの中でも、夏に広島を訪れる重要な理由の一つでした。8月9日に長崎で行われたのと同様に、この式典は非常に大規模なものです。そのため、華やかな演出にではなく、何千人もの人々、主に老人や若者、そして女性が突然、恐ろしい状況で命を落とし、さらに何千人もの人々が一生付き合うことになる放射線を浴びた、この悲しい出来事を記念する行事に集中することが重要でした。この日は、追悼の日であると同時に、平和と核兵器廃絶のために活動する私たち一人ひとりが、決して忘れることのないよう協力し合うことを、今一度思い起こす時でもあるのです。

私はこの2つの記念行事のどの側面についても、あまり批判的になりたくはありません。この2つの追悼行事は記憶するためのものであり、それは十分に行われています。その一方で、私たちはこのようなことが二度と起きてほしくないのだから、平和活動家や被爆者たち自身ではなく、政治家たちがこのイベントの主体となっていることが少し悲しかったです。もし彼らがこの主体であったなら、人々にもっと強いメッセージを訴えることができたでしょうーノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、核兵器の廃絶を今こそ！

広島では私たちは他にもいろいろなことをしたので、全部話すと長くなってしまうが、以下、「ポップコーン」式に要約してみました。（岩谷）久仁子さん、森下（弘）先生、（岡原）民幸さんとの被爆者トーク、暖流での歓迎夕食、平和記念資料館・平和記念公園ツアー、被爆樹木ツアー、本川小学校でのプログラムと茶道体験、袋町小学校、バーバラのお話、フロイド・シュモアとシュモアハウスのお話、韓国での体験DVD視聴、広島城一带と縮景園と県立美術館の一部のツアー、お好み焼き、長谷川ラーメン、たくさんのお弁当（私たちはお弁当が大好き）、木戸先生のお宅での茶道体験、宮島、ホームステイ（代表参加者のみ）、マシューとマラカイとの小グループでのディスカッション等の時間、原爆供養塔でのプログラム（ロジャー、キャシー、マラカイ、WFC合唱団）、バーバラの記念碑でのイベント、灯籠流し、そしてお別れの夕食「焼肉ナイト」。ふう、これらを書くには膨大な文章がふさわいでしょう。だから私はそうしました！キャシーとロジャーは、マシューとマラカイと一緒に民幸さんの家で夕食をご馳走になり、昨年10月にシアトルを訪問したPAXメンバーの民さん、壮さん、真理子さんと優子さんとも一緒にランチをしました。つい昨年シアトルで一緒にいて以来、また親友たちと再会し、お話ができたことをとても嬉しく思いました。そんな中でも、私たちにはロン・クラインと朝食を共にし、「ヒロシマの孫」の公演で美怜と彼女の娘たちと会える時間さえありました。（つづく）



(つづき) 京都

私たちは広島への旅に、京都での始まりと終わりを付け加えました。それぞれが広島での時間とは異なる新しい何かを提供してくれたので、まさに旅日記を両端から挟むブックエンドになりました。京都には、国際平和ミュージアムと、初めて日本文化に触れるという2つの楽しみがあった。4人の代表団の誰もが日本を旅するのは初めてだったので、戦時中に爆撃を受けなかった京都は、何百年前にさかのぼった日本について多くのことを教えてくれました。初めての旅にふさわしい舞台でした。

京都で最初に計画されたイベントは、立命館大学構内にある国際平和ミュージアムでした。ターニャ・マウスが手配してくれたのですが、PAXの旅のスタートとしては最高のものでした。前館長の山根和代さんが私たちを出迎えてくださり、インパール平和資料館のジョイレンバ・ハオバムさん、立命館大学研究部の兼清順子さん、そして4人の大学生が館内をガイドしてくださいました。ミュージアムでは、戦争の歴史的背景や、戦争末期の核兵器使用についての洞察に満ちた分析が提示されていました。ホストは素晴らしかったです。私たちはたくさん学びました！

ホストを務めてくださった皆さんと大学のカフェテリアで昼食をとった後、別れを告げて、金閣寺まで10分ほど歩きました。これが、この旅がいかに蒸し暑いものになるかを実感する最初の瞬間でした。金閣寺を見て、庭園を歩いた後、大徳寺（禅寺）の静穏なうぐいす張りの床まで行こうと30分ほど歩きました。そこを見つけるとすぐ私たちはこの禅寺と庭園をめぐり、次に移るまでしばし休憩しました。この暑さでは、観光はここまででした。

翌日、京都での最後に丸一日時間があった日、私たちは伏見稲荷大社に行き、山頂までの1万基の鳥居ウォークを体験しました。私たち5人は山頂を目指しましたが、あとの1人、チャールズはその最初の部分を見た後、賢明にも汗をかくよりもショッピングを選びました。他の3人（キャシーと私ではありません）は、頂上に着いた後、別の道（ショーンはこれを「思いがけない回り道」と呼んでいます）を下りました。キャシーと私は全行程を終えた後、ホテルに戻るエネルギーを得るために巨大なイチゴのかき氷パフェを食べなければならぬほど疲労困憊していました。午後から夕方にかけては、みんな各自で行動しました。チャールズとベンは京都御所を訪ね、大いに楽しんでいました。

翌日、私たち数人はホテルから大通りを挟んだ向かい側にある知恩院を見学しました。大きな寺院で、巨大な入口の門と2つの庭があります。仏教の宗派を知っている人ならご存知のように、浄土宗の総本山でもあります。本堂の近くを歩いていると、礼拝

の中で「ジーザス・ラブズ・ミー」「ジョイ・トゥ・ザ・ワールド」「アメイジング・グレイス」の曲がフルートのようなもので演奏されているのが聞こえてきて驚きました。日本ではよくあることだと思われますが、複数の宗教を並行して信仰することの一例なのかもしれません。よくわかりませんが、私たちには知る術もないでしょう。

長崎

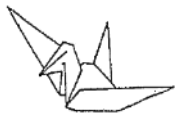
旅の終わりは長崎でした。長崎での最初のイベントは、8月9日の慰霊平和祈念式典でした。ここでも再び広島と同じような大きなイベントでした。いくつかの違いは、被爆者がスピーチを行ったことと、日本の指導者たちが平和と反核の世界へ向けて努力するよう、より強い口調で訴えたことでした。式典の後、私たちは永井博士に関する資料館を見学しました。爆心地は、広島の小さなモニュメントに比べると、はるかに大きく壮大なスケールでした。原爆資料館は良かったのですが、原爆投下の文脈について説明を付け加えた資料はなく、広島のように静かに振り返り黙想する場であるメモリアルホールで終わっていました。

翌日、私たちは浦上天主堂に行きました。ターニャはまたしても、浦上天主堂とウィルミントン大学平和資料センター（PRC）との繋がりを利用してくれて、天主堂での講演とツアーを企画してくれました。その繋がりのおかげで、私たちは観光客が立ち入ることのできない多くの場所に入ることができました。私たちのホストは高見名誉大司教でした。温厚で気さくな方で、私たちの質問には何でも答えてくださいました。聖堂の歴史や、PRCから天主堂に返還された十字架の話聞かせてくださいました。8月9日のイベントの前日だったため、PRCが浦上に返還した特別な十字架は、普段のように礼拝堂に置かれているのではなく、主祭壇の目立つところに置かれていました。私たちは聖堂と礼拝堂の両方に立ち入ることができ、他の特別な遺物（被爆したマリア像の跡など）も見ることができました。

私たちは最後に長崎の被爆者の大場さんに長崎駅の近くでお会いし、彼のお話を聴きました。被爆者の証言で訪問を終えるのは、まさにこの旅の「プログラム」の結末としてふさわしく、私たちがなぜそこに来たかを改めて思い起こさせてくれました。

私たちは、すべて余すところなく4人の代表団と共に楽しみ、またWFCの代表団との交流を大いに楽しみました。観光し、一緒に食事をし、訪問し、平和について聞き、学び、語り合いました。4人の代表団についてはもっと語りたいところですが、そこは彼ら自身に語ってもらうことにしましょう。平和を！





アメリカPAX参加者

ショーン・アレント

日本でのPAXプログラムの経験について心から感謝している。今回の旅は、核兵器廃絶の活動経験の浅い私にWFCが実現させてくれたものであり、そのことに深く感謝している。私はこのような国際交流の価値について多くを学んだ。

WFCでの日本滞在は、私を根本的に変えた。多くのことが変わったと感じる。広島と長崎での経験を振り返ると、自分を振り返るのは好きではなかったし、私はアメリカに対してバラ色の見方をしてきた人間ではない。労働運動への弾圧、奴隷制の歴史、人種差別、極秘プログラム、冷戦下のクーデターなどについては十分な長さの本を読んできたし、アメリカの侵略戦争、気候変動、国内での極端な富の不平等を経験してきた。しかし、私のアメリカ観はさらに悪化した。私は広島と長崎への原爆投下を、正義を求める犯罪ではなく、歴史の中の静的な一点として受け入れていた。今は、原爆が私の友人たちに対してなされたものだという視点を持つようになった。

核の影響を受けた地域社会と過ごせば過ごすほど、冷戦時代に行われた核犯罪は想像を超えるものになる。ワシントンではマーシャル人、ヤカマ人、ワナパウム人がこのような扱いを受けていたとは信じがたい。彼らは親切で世界征服など考えていない自給自足の人々だ。しかし、このような残虐行為の現場に居合わせることは想像しがたい。ワシントン州ハンフォードでプルトニウム原子炉を訪ねた。そこはワナパウムの人々から奪われた土地だ。放射能はこれらの文化の自給自足を奪い、無数の健康問題を引き起こした。

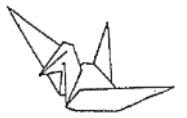
広島では原爆ドームを訪れ、破壊された学校、ぼろぼろの衣服、影と化した人々を見た。森下先生や阿部さんのような被爆者と話し、彼らの痛みのほんの一部を感じた。原爆がもたらした残忍さに憤ると同時に、ホストファミリーや恩人の優しさ、日本文化の美しさ、地元の平和推進者たちの献身的な姿に感銘を受けた。信念と不信・同情と怒り・ショックと恐怖、これらが私を突き動かしたのだ。

2023年、シアトルで世界親善代表団のイベントを手伝うことがあった。まさか2024年に広島と長崎を訪問する機会が訪れるとは思ってもみなかった。ワシントン州タコマの自宅に戻ってから、平和のための退役軍人のゴールデン・ルール・プロジェクトを歓迎するさまざまな聴衆に、バーバラ・レイノルズとワールド・フレンドシップ・センターの話を語る機会に恵まれた。私がこれからも語り継いでいくことを約束する。ワールド・フレンドシップ・センターの背後にいる偉大な人々の多くを知り、核兵器や戦争に反対する闘いを共有できること、世界友好のために自分の役割を果たせることを誇りに思う。

私たちの団体「核兵器に反対するワシントン」のブログに考察を追記した。

<https://www.wanwcoalition.org/wanw-blog>





愛する広島へ

PAX参加者 ホラシオ・ペレズーモラレス

☆感謝

レポートの前に、まずワールド・フрендシップ・センターの新しい友人たちに感謝の意を表したい。直接・間接的に、それぞれの方法で私たちの経験をより平和的なものへと導いてくれた人たち。私たちに深く関わり、忍耐と寛大さをもって接してくれたすべての人々。目に見える形であれ、そうでなくても、これらの恩を10倍にしてお返ししたい願うばかりである。「悪魔は細部に宿る」というけれど、私はそこで天使たちに出会えたことに深く感謝している。

☆セミの鳴き声

これを書いてひと月にもならないが、私の耳にはまだセミの声が聞こえていた。セミの鳴き声のせいで、あまり長い間考え事をする事ができなかったことを覚えている。被爆した地域の歴史と現在の現実の性質上、突然そうなったことは、ある種の幸運に変わった。核戦争の恐ろしさを私はほとんど知らなかったし、覚悟もしていなかった。時を経て年長者となった被爆者の口から、子ども時代や亡くなった大人たちの話を聞き、畏敬の念を抱いた。実際に彼らはそれを経験し、他の多くの人々もそうだったのだ。

☆来日前

PAXやワールド・フрендシップ・センターのことを何も知らなかった2024年初め、私は友人のランディから、3ヶ月間広島を訪れ、広島に住んで働いている友人の家に滞在する予定だと聞いた。「遊びにおいでよ！」と言われ、行きたいとは思ったが、フルタイムで働きながら勉強に汗を流している最中だったので、とてもできるとは思わなかった。そんなとき、ご縁があったとしか言いようのないタイミングで、PAXに応募しないかと誘われた。

☆追悼

日本文化の多くの面で、目的に忠実であることがすぐに分かってきた。一時的ではあるが、私はその中に自分の居場所を見つけることになる。その意味で、日本は経験したことのない、静かであると同時に騒がしい国だった。広島に残っている目に見える傷跡や、もはや表には出ていないものを見てとても驚いた。



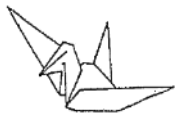
原爆は、爆心地からの近さによって壊滅の大きさが異なり、資料館はそれを反映していた。周囲の公園、彫像、原爆ドームは、それを思い起こさせるものだった。慰霊碑は記憶するために作られるものであり、広島慰霊碑は人種に関係なくそれを実現した。自国や自国民の歴史について考えたり発表されたりするとき、世代を超えた共感の一面がある。広島の記憶は私自身のものではないのに、まるで愛する人の葬儀に個人的に招かれたような気分させられた。その人（あるいは場所）を知らなくても、この出来事が与えた恐るべき悲しみの一端を目の当たりにし、親近感を感じることができた。初対面の人に「広島出身ですか？」と尋ねるとき、ある意味、私は「ご遺族の方ですか？」と尋ねていたのだと思う。

☆帰国準備

血は繋がっていなくても、私は広島の人々が原爆によって結びついているのを見た。日本人々はそうであった。アメリカもそうである。私たち一握りの個人もまたそうなのだ。平和資料館で見た被爆者が描いた絵は、恐怖の表現であると同時に、二度とこのような思いをする人が出ないように、自分のできる範囲で、どんなことでもいいから活動したいという、心を動かされた人への願いでもあった。そして、それらの作品を目にし、感動したとき、私は責任を感じた。しかし、ホストファミリーと新しい友人たちがうまくやってくれたのは、人道的な部分を事後に示したことだ。私が経験したホスピタリティと細かい配慮には本当に驚かされた。代表団としての私たちの使命は、ただ自分たちが何者であるかを分かち合うことだった。これは常に私の中に宿る恩返しであり、うまくいけば付加価値をつけて恩返しができるだろう。

帰国した今、セミの声は物理的には聞こえないが、確かに聞こえている。

Tlazocamati - (ありがとう)



PAX参加者

チャールズ・マウントジョイ



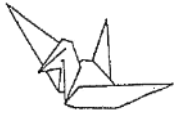
このPAXの旅で最初に到着したのは京都で、そこでPAXのホスト役を務めてくれるWFCの前館長たちに会った。ロジャーとキャシーはとてもすばらしく、歓迎してくれる人たちだった。私は彼らが引退後も続けているこの活動に心から感銘を受けている。

彼らとこの経験を共有できたことを幸せに思う。京都では、立命館大学にある「世界平和ミュージアム」を見学することができた。博物館は美しく整理されており、戦時中の日本の責任や、戦前の非人道的な行為を認める進歩的な資料の構成を高く評価している。これは無知なナショナリズムによってしばしば影を潜めがちな、自国を省みることによって世界的な改革がもたらされなければならないことを実証していた。

京都の後、私たちは広島に移動し、そこでWFCと現在の館長であるマシューとマラカイを紹介された。WFC関係者の皆さんには、このPAXの旅と、関連して企画された多くのイベントに、資金を提供してくださったことに言葉にできないほど感謝している。私たちは常に忙しく、猛暑の中を歩きまわったが、計画されたイベントはどれも有意義で、復興中のこの街の平和的なメッセージをそれぞれの方法で伝えるものだった。多くの被爆者から直接の証言を聞く機会を得て、私を感動させ、やる気にさせた。また、アメリカの医療制度を通して、自分なりに平和のためにどのように活動しているか、というプレゼンテーションも行うことができた。愛と平和を広める人々のさまざまな方法を学ぶのは本当に楽しかった。

崇徳高校新聞部で平和のメッセージを広めている2人の高校生、シオリとタカと話す機会があった。WFCの人々だけでなく、若い高校生たちまでもが、それぞれのやり方で平和の美しいメッセージを広めていることに、愛と努力の大きさを感じ、本当に感動した。

この旅行で多くのものを持ち帰った。最大のものは、平和にはたくさんの断片(many pieces of peace)があるということ、すべての小さな断片が組み合わされないと平和は達成できないということだ。全部がつながっていて、あらゆる形の平和活動が重要であるという視点を得た。私は以前この分野で非常に悲観的で、たとえ一部の人々や問題を解決することができたとしても、より大きな問題がまだ存在しているように感じていた。PAXの旅は、団結することの大切さ、平和を愛する人たちが小さなことをコツコツと積み重ね、大きな変化のために団結することの大切さに気づかせてくれた。だからこそ私は、WFCやウィルミントンのピース・リソース・センター、そして世界中でPAX旅行を企画できる協力団体が大好きなのだ。多様な構成、組織、国がひとつの共通の目標を持ち、自分たちの知っていることを通して平和的メッセージを広めるという仕事をする。WFCとPRCは単に核兵器廃絶を訴えるのではなく、世界的、国際的進歩の道しるべである。彼らは異なる人種、文化、言語が世界中から集まり、私たち全員が夢見る世界に向かって努力できることを証明している。希望と楽観主義(optimism)の象徴なのだ。



お別れの言葉 マラカイ・ネルソン



「他人なんていない」 2024年10月9日

ワールド・フрендシップ・センター、アメリカ委員会、「友愛」読者の皆さん

深刻化する気候変動と世界各地の社会的混乱に直面する中、感謝の言葉で私の考えを締めくくりたいと思います。宗教的、社会的指導者たちは、感謝するという習慣がいかに私たちを支え、互いの絆を強めるかを何度も思い起こさせてくれます。以下に記したことは十分ではありませんが、皆様への感謝と祝福の気持ちが少しでも伝わり、今後の私たちのつながりの礎となるように願っています。

☆理事会とアメリカ委員会の皆さん

美しい国(日本)、そして戦後復興したとはいえ、色々な意味でいまだに回復の途上であり複雑なアイデンティティと向き合っている都市、広島へと旅する一生に一度の経験を与えてくれてありがとうございます。マッシュと私を受入れることにはリスクもあったと思いますが、私たちは期待に応えられるようベストを尽くしました。皆さんが誠意をもって運営されている組織(WFC)に、私のエネルギーと若さを注ぎ、挑戦する視点を与えていただいたことに深く感謝しています。

☆スタッフ・ボランティアの皆さん

尽きることのないおもてなしの心と温かさで来訪者を迎えて下さりありがとうございました。海外からの訪問者を大切に、親切にしてくださることは、WFCの最大の強みであり、私は毎日皆さんからそれを学んでいました。皆さんはイエーツの言葉「見知らぬ人はいない。まだ会ったことがない人がいるだけだ」を体現しています。この無条件の受容力が人々に平和の絆を育み、誰も気がつかないうちに人々を強く結びつけるのです。

☆WFC関係者の皆さん、特にスタッフの皆さん

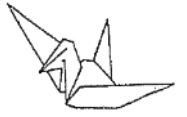
館長の仕事を学ぶ間、忍耐強くお付き合い下さりありがとうございました。施設のメンテナンスは絶え間ない挑戦でしたが、皆さんの優しさは尽きることがありませんでした。

☆数えきれないほどのWFCコミュニティの皆さん

私をWFC以外の広島のコミュニティーにつないでくれてありがとう。おかげでゲームナイト(広島の友達とゲームで交流して楽しかったこと)やイベントの飛び入り、文化祭等に参加し、活動家や地域のリーダーたちと出会うことができました。ガザでの大量虐殺が勃発してからこの1年間、彼らと多くの時間を共に過ごしました。

両手を広げて私を歓迎し、絶え間ない笑いとおいしい食事、そして私が愛され、大切にされているという安心感を与えてくれてありがとう。若者である私にとって健全なコミュニティは特に重要で、その中で成長し進歩することができるし、自分が誇りを持って貢献することができます。

(つづく)



お別れの言葉（つづき）

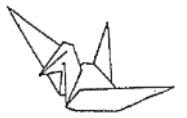
WFCの活動以外でも、原爆ドームでの活動を応援して下さいありがとうございます。
私達それぞれが複雑な関係にあっても、平和公園で友人たちにお茶や軽食を差し入れしてくれたり、「STOP GENOCIDE IN GAZA」のキャンドルに火を灯してくれたり、平和の歌を歌ったり、詩を朗読したり、行動を続けるよう励ましてくれました。今後のために数えきれないほど何回もお話ししてきたことをここに書いておきます。「ビジル」（抗議活動）は、広島と世界を動員してパレスチナの人々の大量虐殺を終わらせ、パレスチナを開放することにおいてのみ重要なのです。パレスチナに対する私の情熱を、ビジルへの近視眼的な情熱と勘違いしないでください。私はビジルよりもっと大きなことに焦点を合わせており、WFCでパレスチナに関する教育的で行動的なイベントを作ろうとしたのは、そのためです。WFC及び同種の平和関連のNPOには、世界の不正義に対して動員をかけ、すべての大量虐殺が一刻も早くなくなり、戦争が非論理的なものとなり、解放的で公正な平和が唯一の選択肢として残されるようにする独自の責任があると信じています。ですから、パレスチナの大量虐殺に対してWFCで行動を促すことは、私の館長としての職務の自然な延長でした。ガザを気遣う皆さん一人ひとりの行動と、たびたび苦悩し、熱く語る私の態度を受け入れてくれたことに感謝しています。

私の新たな人生の可能性を示してくださったことに感謝しています。大学4年生のときから、私のキャリアにおける主要な指針は、単純なことや簡単なことよりも、常に正しいことを追求することでした。このことは私の20代における最大の冒険につながったが、正直なところ、自分が次にどこへ行こうとしているのかというビジョンを持つまでには至りませんでした。しかしWFCと広島での経験のおかげで、人生で初めて将来がより明確になりました。私の望む道は、コミュニティ・オーガナイズ、教育、先住民の主権に対する粘り強い主張、そしてあらゆる形の覇権主義の破壊です。気候変動が加速する中、私たちは全面的な変革の時を迎えなければならないと感じています。軌道修正がなければ、世界のエリートたちが自分たちの利益のために多くの人々を犠牲にするようになり、ガザのような大量虐殺が日常茶飯事となってしまいうでしょう。誰もが安全ではなく、パレスチナとの連帯は、まさに私たち自身の幸福との連帯となります。私は、私たち全員が生きることになる災害の多い未来において、私たちの集団的な生存と進化の道を切り開くために、私なりのささやかな方法で働くことに深い喜びを見出しています。バーバラ・レイノルズ、ノーマン・カズンズ、松原美代子、森下弘のような人々の目撃証言は、私にやる気を起こさせ、そのような世界を拒否するよう常に背中を押してくれます。彼らのおかげで「シカタガナイ」は私にとって忌み嫌うべき言葉となりました。平和の偉人たちを紹介してくれた皆さんには感謝しています。あなた方を通して、彼らは永遠に私を変えたのです。

☆最後に、生徒の皆さん

勉強を続けてください！英文法についても、私たちが属している世界についても、難しい質問をし続けてください！私のような若い活動家と知恵や視点を分かち合いながら、この世界に関わり続けてください。私はもうクラスにいないので、広島の若者を積極的に探してください。お茶を飲みながらも、毎週の授業でも、抗議活動への支援でも、どんな形でも構わない。広島・ミャンマー・コミュニティとパレスチナ連帯コミュニティは、あなたを必要としています。私たちは、あなたが私たちと同じ年齢であった頃から日本がどのように変わったのか、なぜそうなったのかに耳を傾ける必要があります。私たちは、被爆者の成功と失敗について聞き、そして、被爆者にとっての「二度と繰り返さない」は、「すべての人にとって二度と繰り返さない」を意味しなければいけません。皆さんは物語の語り部です。その計り知れない価値を認識し、どうか広く惜しみなく、皆さんの物語を分かち合ってください。そして、またすぐにお会いできることを願っています！

WFCのすべての友人たちの、クレール舟入中町での新たな門出を祝福します。
ブラッドとスー・コックス夫妻は素晴らしいホスト、友人となるに違いありません。
感謝をこめて



新館長ごあいさつ ブラッドリー&スーザン コックス

ブラッド・コックスとスーザン・コックスよりご挨拶申し上げます！
私達はワールド・フрендシップ・センターの新しい館長として、2024年11月4日に広島にやってきました。
新しいWFCの施設で、メンバーの皆さんと一緒に、平和プログラムを続けていけることを楽しみにしています。
その中には、原爆について詳しく知り、平和と核軍縮の活動についてもっと学ぶために広島を訪れる人々へ、簡易宿泊施設の提供を再開できるようになったことも含まれます。
私達はワシントンD.C.の南から、およそ3時間のところにあるバージニア州フォレストの自宅から広島にやってきました。バージニア州のその地域は、過去34年間私達の家があったところです。私達には成人した2人の子供がいます。息子のテイラーは妻のケイティと、ワシントンD.C.近くのバージニア州郊外北部に愛犬とともに住んでいます。娘のキャロラインと夫のライアンは8月に結婚したばかりで、2匹の愛犬とともにイギリスの北イングランドに住んでいます。



ミラノ観光

私達ふたりは1986年にブリッジウォーター・カレッジを卒業しました。ブラッドは物理学とコンピューター・サイエンスを専攻し、スーは初等教育を専攻しました。ブラッドはその数年後、バージニア大学で電気工学の修士号も取得しました。私達は、それぞれの分野でその仕事のキャリアの大半を費やしました。電気エンジニアのブラッドは、商業用原子力発電所にシステムとサービスを提供するフラマトム社を最近退職しました。

スーは2018年に公立小学校の美術教師を退職したので、ブラッドがドイツのエアランゲンのオフィスへ1年間出向する際、一緒に行くことができました。私達は旅行と、世界中の人々との出会いを楽しんでいます。スーは数年間、コミュニティでオーペア（給与支給型ホームステイ）をコーディネートし、その家族の子供たちが高校生の時にドイツから1人、ノルウェーから1人の留学生を受け入れました。

旅行以外の時間、スーザンは読書、散歩、ガーデニング、あらゆる種類のアート、語学学習（ただし、日本語が難しいのはよくわかっていますので、どうかご容赦を!）ショッピングを楽しんでいます。ブラッドは空いた時間に家の修理と改造、木工、車の修理と修復、戦略ゲーム、読書を楽しんでいます。

約33年間、私達は歴史ある平和教会のザ・リンチバーク・チャーチ・オブ・ザ・ブレザレンの会員です。ブラッドは、教会地区の平和運動委員会の一員であり、地元の平和教育センターの役員も務めています。私たちの教会コミュニティの数多くの懐かしい思い出のひとつに、約30年前、光栄にもWFCと大変御縁の深い被爆者の松原美代子さんをお迎えしたということがあります。

リンチバークの幅広いコミュニティで彼女が分かち合ったことは、私達の小さな教会が共有できた、最もインパクトのあるメッセージのひとつであったと思っています。これが、私達がワールド・フрендシップ・センターを知った最初のきっかけでした。

その記憶は、仕事をリタイアして、平和維持の可能性の中で私達が役立つことができる、さらなる方法を見つけることができるまで、ずっと私達の心に残っていました。ワールド・フрендシップ・センターの一員となり、支援できるすべての活動をとっても楽しみにしています。



息子テイラー&妻ケイティ
娘キャロライン&夫ライアン
ブラッド&スー